
やり直し～幸せの追求

にーとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やり直し〜幸せの追求

【Nコード】

N1845Y

【作者名】

にーとん

【あらすじ】

目が覚めると暗闇の中にいた。

ここから人生のやり直しができるらしい。

（文芸部誌に載せる小説です。）

1 死後の世界

目を開けると、ただ暗闇ばかりが広がっていた。

どうしてこんな所にいるのかも分からない。ただ、なんとなく懐かしい感覚がしていた。

立ち上がると、ほのかな光を感じた。

少女がただ僕を見てそこに立っていた。

少女の周りだけかすかに光っている気がした。

「気分はどう？」

彼女は小さな、けどはつきりした声で僕に問いかけた。

「悪くはないかな」

彼女は小さく首を傾げた。

「それで、あなたはどうしてここに来たの？」

僕は答えようと口を開いて、困った。

どうしてここにいるのか、まるで分からない。

「分からない」

僕は正直に答えた。彼女はますます不思議そうな顔をした。

「ここがどこだかも分からない？」

「いや……」

知っているような気がした。

何の記憶もないのにそんなことを覚えているのはおかしいような気はしたが、僕は確かにこの場所を知っているはずだった。

「確か……やり直す為に……」

「そう。ここは死後の世界。幸せだと思えずに死んだ人の為に、やり直しをさせる為の場所」

死んだ後の世界。

ということとは、今ここにいる僕は何者なのだろうか。自分を見てみると、きちんと体があるように思える。

思い通りに動かすこともできる。

「それは死ぬ前の姿だよ。この世界でその姿で一日だけ過ごせる。それでもまだ幸せだと思えなかったら人生をやり直すの」

けれど、僕はどうやって死んだかも覚えていない。

僕は何が不満でここに来たんだろう。

とにかく、僕は彼女に付いてこの世界を回ってみることにした。

「世界では一秒間に何人もの人が死んでいる」

彼女は歩きながら呟いた。

「ろくに言葉も喋れない内に死ぬ人だっている。人に命を奪われる人、自分で命を絶つ人、災害で亡くなる人。皆自分を不幸だと思っている」

彼女の声はやけにはつきりと聞こえてくる。

ここが暗いからだろうか。いったいどれくらいの広さなのかも分からない。

「何人もの人がここにくる。何人もの人が自分を不幸だと思っている。そして人生のやり直しを望む」

彼女は立ち止まった。男が一人そこにいた。

年齢は二十歳程に見えた。

「一日たったわ。やり直したい？」

彼女は男に言った。

「ああ。俺はやっぱり納得できない」

男は力強い声で答える。

彼も不幸な人なのだろうか。

「やり直せるのはこれで最後です。何か持って行きたいものはある？」

「前世の記憶を」

「分かった。それじゃ、行ってらっしゃい」

言って彼女は、男の胸にとん、と触れた。

男は消えた。

「彼はどうしてここに来たんだ？」

「彼は紛争に巻き込まれて死んだの」
それだけ言って彼女は先に進んだ。

2 半端に優しすぎる男1

更に彼女について進むと、一人の青年がいた。
今日覚めたところらしい。

「気分はどう？」

少女が聞いた。

「ここはどこ？」

青年が、質問には答えずに言った。

ここは死後の世界。人生のやり直しができます。
少女が答える。

「そうか……。あなたはなんでここに？」

青年は僕に問いかけているようであった。

「僕はなぜか全く覚えていないんだ」

僕は苦笑混じりに答えた。

「君は？」

「俺は……」

青年は口ごもった。

「いや、言いたくなかったら言わなくて良いよ」

僕は慌てて付け加えたが、彼はぽつりぽつりと話し始めた。

「俺は恋人の為に生きてきたつもりだったんです。バイトをして将来の為にお金を蓄えていたし、彼女が困っていたら必ず助けた。彼女には絶対に辛い思いをさせたくなかったんです。俺は人生の全てを彼女に捧げるつもりで生きてきた」

青年は段々と泣きそうな声になっていた。

「だけど、彼女は俺に何も言ってくれなかった」

彼はとうとう目に涙を溜め始めた。

「俺は何度も彼女のことを助けたつもりでした。彼女が父親から暴

力を受けている時は彼女の父にやめるように直接言ったり、暴力の原因が彼女の親が借金をした所為だと知って頑張ってバイトしまくってお金を稼いで渡したりとか、全部彼女には内緒でやっていたんです。でも彼女が分かってくれなかった」

彼の目から涙が一滴零れると、もう彼は止めようがない位の勢いで泣き始めた。

「安心しろ」

僕は彼の頭を撫でながら言った。

「ここから人生はやり直せる」

彼は涙を流しながらこくこくと頷いた。
いつの間にか少女はいなくなっていた。

3 半端に優しすぎる男2

「俺の優しさは偽善でした。優しさですらない」

彼は言った。僕たちは少女を探して歩いていた。

「内緒でやっておいて、感謝されないことに憤るなんて、おかしいですね」

彼は自嘲気味に笑った。

「きつとそういうことは、もっと心が強い人にしかできないんだ」
記憶はないけれど、確かそんなようなことが僕にもあった気がした。

いつの間にか、原因と結果が逆転してしまうのだ。

優しくすれば感謝されるのが当たり前になって、感謝される為に優しくしようとしてしまう。

感謝されないと、じゃあ優しくしなければ良かったと思ってしまふ。

「だけど、人生をやり直すってどうということなんでしょう」

男が僕に聞く。

「僕もよく分からないけれど、次の人生に何かを持って行けるらしい。さっき見た奴は記憶を持っていつていたから、もしかしたら性

格とかも変えられるのかもしれない」

「性格を変えられるんですか……」

「推測だけだな」

僕は笑いながら付け加えた。

やり直すというのは新しい人生なのだろうか。それとも同じ条件からまた人生をスタートするのだろうか。

「君は何を持って行きたい？」

僕は退屈凌ぎに彼に質問を試みた。

「そうですね……」

彼は少し上を向いて考え始めた。

「何を持っていくかは決まらないけれど、前世の恋人とはまた恋人でいたいです。次こそ、幸せになりたい」

「へえ……」

感心した。彼は恋人のことを恨んでも良い位だと思っただけけれど、それでも好きなのだろうか。

「君は本当に恋人のことが好きで、彼女の為に色々やったんだろ。」

内緒で何かしたってのは格好付けで、それがなければ本当の善だったんじゃないかな」

「そうですね」

心から思ったことだった。彼はきちんと恋人の為に善いことをしたのだ。

偽善なんかじゃない。

すぐそこで少女が一人の女と喋っていた。

4 とても美しい女とても醜い女

「皆私のこと、美しい美しいと言って言い寄ってくるの」

女は言った。

僕と青年と少女は、女の話聞いていた。

「だけど私より美しい女だって世の中にはいるはずよ。彼らは私が美しいから言い寄ってくるのよ。だからもし交際しても私より美し

い女に浮気するに決まっているわ」

彼女の言うことは贅沢です、と青年が陰で言った。

「だって、何人もの人に言い寄られているんですよ？ 皆本気のはずです。それなのに信じようとせず」

まあまあ、と僕は彼をなだめた。

「彼女にだって、辛い過去があったのかもしれないだろ？」

女は少女を相手に話を続けていた。

「それで、私にしつこく言い寄っていた男の内の一人に頭がおかしいようなのがいてね。その人に殺されたの」

後ろからぺたぺたと足音が聞こえた。

「何よそれ、羨ましい」

別の女が言った。

振り返ると、大層醜い顔をした女が立っていた。

「あなたみたいなのは私の苦労は分からないでしょうね」

醜い女が言った。

「そうね。でも私の苦労も分からないでしょ」

美しい女が答える。

「あなたは充分に幸せになる道があったはずよ」

醜い女が言う。

「それを何かとケチつけて選ばなかったのはあなたでしょ」

美しい女は怒ったような顔をした。

「あなたは良いわね！ 頭のおかしい男に命を狙われる心配をしなくて！」

醜い女も反論し、二人はついに取っ組み合いの喧嘩を始めた。

5 いじめっここといじめられっこ

「一日たったわ」

少女が言った。

「やり直したい？」

その少年は悩んでいた。

「やり直したらどうなるの？」

「同じ親の元に生まれて、同じ条件から人生が始まるの」

「じゃあまたいじめられるかもしれない？」

少年は不安そうな顔で言った。

「そうね」

少女は思案顔になった。

「人生なんて運だからね。どうなるか分からないわ」

「うーん……」

少年の体は段々と薄くなっていた。

ここにいられる時間がもうないのだ。

「早く決めないと」

少女が急かした。

「だって僕は、生きていて良かったなんて一回も思ったことがないし、やり直しても同じだったらやり直したくないし……」

少年は半分泣いていた。

「じゃあこのまま終わる？」

「だけど……」

「一つだけ持っていけるぞ」

つい見ていられなくなった僕は言った。

「一つだけ、次の人生に持って行きたいものを持っていける」

少女は責めるような顔で僕を見た。

「じゃあ、僕強くなりたいよ」

「分かった」

少女は短く答えた。

「やり直しますか？」

「うん」

それじゃ、と彼女が少年の胸に手を伸ばした。

「行つてらっしゃい」

もうほとんど見えない少年の胸を彼女が軽く叩くと、少年は完全に消えた。

あの子は、と少女が言った。

「あの子はあれで三回目のやり直し」

「前は どうしてやり直したんだ？」

「彼は強くて、いじめっ子だった。小学校の頃いじめていた子に中学の頃刺されて死んだ。彼は反省して、皆を傷付けるような強さはいない、弱くしてくれと頼んだ」

僕は何も言えなくなってしまった。

「じゃあ一番最初は……」

青年が呟いた。

「そう。強くなりたいと言ってやり直した」

6 やり直し

「一日たったわ」

沈黙を破ったのは少女の声だった。

「どうしたい？」

「やっぱり俺はやり直したいです」

青年が答えた。

「僕は記憶もないし分からないけれど……本当に幸せな人間なんているのかな」

少女は微笑む。

「それに気づいたあなたは偉い。ここには世界で死んだ人のほとんどがやってくる。そしてほとんどがやり直しを望む。だけど結局またここに帰ってくるの。そしてやり直しの上限を超え、他の魂とごちやまぜにされて新しい魂に変わっていく」

幸せとはなんだろうか。

あの美しい女性の人生は幸せな人生だったと言えるだろうか。

醜い人間は幸せの為に美しくなることを望むのに、美しい人間は美しくても幸せではない。

強くなった少年は、弱くなることを望んだ。弱くなった少年は強くなることを望んだ。

「そろそろ決断の時間だよ」

少女が言った。

「やり直したいですか？」

「……………ああ」

「何か持つて行きたいものはある？」

「ここでの記憶は持つていける？」

「大丈夫」

「じゃあ、それで頼む」

それじゃ、少女は僕の前に立った。

幸せな人生を歩もう。ここでの記憶を頼りにして。

幸せは自分で掴むもの。

自分で決めるものなのだ。

彼女の指先がとん、と胸に触れて。

僕はその場から消えた。

「それじゃ、行つてらっしゃい」

（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
何かを感じていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1845y/>

やり直し～幸せの追求

2011年11月8日03時24分発行